

呉の金陵府と南唐の西都江寧府*

久保田和男*

Jinlingfu of YangWu kingdom and Jiangningfu, the west capital of Southern Tang dynasty

KUBOTA Kazuo

This paper is a study of Jiangning Fu, the capital of Southern Tang, the predecessor of present-day Nanjing City. I thought it was rebuilt as a military base for the Navy at the end of the Tang dynasty. The change in the Yangtze River was closely related to the construction of the city. I considered the process of transitioning from the Kingdom of Wu to the Southern Tang dynasty and the problems of building this city. Finally, we positioned this city in the history of the Chinese capital.

キーワード：楊行密 徐温 徐知誥（李昇） 南唐 五代十國

1. はじめに

現在の南京市は、古い歴史をもつ。特に六朝の建康の中國文化史における役割は大きいと考えられている。陳を滅ぼした隋の文帝は、遠征軍の指揮官たる楊廣（煬帝）にその徹底した破壊を命じ、この大都會は耕地と化した。このような都城破壊は、中國史において何度か見ることができる。

たとえば、朱全忠が、唐の長安を破壊し、「丘墟」とした行爲（907）¹⁾は、唐の衰亡を象徴する出来事として注目される。都城史としては、これ以後長安は、都城として再建されることはなく、この後の都城は、すべて函谷關の東側に置かれることになる。

それに對し、隋によって破壊された建康は、朱全忠が長安を破壊するのと相前後して、復興が行われ、そこから現在の南京市にいたる新たな都市史が始まる。本稿では、この都市が、呉では昇州金陵府、南唐では都城「西都江寧府」として政治的な中心性を獲得する過程を考える。特に都城史の一段階として、呉の揚州から南唐の「遷都」を問題とする。如上の問題を考察することは、言い換えると、「五代十國」として我々が認識している時代を、都城史の視点か

ら、そして江南中國史の視点から再検討する試みである。

我々が「五代十國」を考えると、中原國家を正統とし、そのほかの國を別のくくりとして考える宋人の史觀に強く影響を受けている。山崎覺士氏は中原國家を軸にしたこの時代獨特の秩序があったことを實證し、「五代天下秩序」と名付けている²⁾。宋人の史觀を問題とする山崎氏にしても、中原國家に中心性を與えている。

南唐は中原國家が混迷していた時期（後晉・後漢）に、文治主義を掲げて民力休養に努めていた。國力が充實し禮制も整い郊祀を実施していた。政治的には唐朝の後繼王朝として正統性を主張した。本稿は、南唐史を、昇州が金陵そして江寧府として整備される都城史の立場から論じ、南唐ならびに江寧府の歴史的な位置づけを考える試みである。これは、「五代」について新しい可能性を考えるものである。

2. 呉王國と揚州（江都府）・昇州（金陵府）

a. 呉王國の成立と「五代十國」のはじまり

黄巢の亂以降の唐末内亂において、長江下流域においても様々な出自の軍事指導者が、對立と結合を繰り返していた。そのような中で、揚州（江都府）は地域の中心地として、戰亂の舞臺となった。

揚州は、大運河ルートの要衝であり、唐代には淮南・江東の物資の中心地として繁榮し「楊一益二」

* 2022年4月23日 第246回 宋代史談話会にて報告

*1 リベラルアーツ教育院教授
原稿受付 2022年5月20日

といわれた。また、對外貿易港としても重要で、日本の遣唐使の發着地であった。鑑眞の故郷としても日本人にはなじみ深い。したがって、唐代の揚州の規模はかなり大きく、周圍 40 里 (17 km 800m) に及んだ³⁾。しかし、海港としては、長江の土砂の堆積によって、その能力は唐末には失われていた⁴⁾。黄巢の亂をはじめとする唐末の戰亂によって、度々被害を受ける。特に孫儒軍の劫掠と楊行密集團らとの死闘は住民に多くの犠牲を出した⁵⁾。

楊行密は淮南地方をほぼ平定し揚州を根據地とする。唐朝からは 892 年淮南節度使⁶⁾の地位を與えられた。その直後から、大運河の北の據點汴州 (宣武軍節度使の會府) を支配する朱全忠は軍を南下させ、運河に沿った地域で通じて抗爭がつづく。楊行密軍は 897 年、朱全忠の派遣した大軍を奇策によって大敗させた (「清口」の戦い⁷⁾)。その後、朱全忠は楊行密への攻勢をとることはなくなり、楊行密が淮南に割據することになる⁸⁾。

902 年、朱全忠から逃れていた唐の昭宗は、楊行密に呉王の地位をあたえる⁹⁾。それに應じた楊行密は、「東面諸道行營都統」として軍を北進させるが、楊行密、兵を發し朱全忠を討たんとし、副使李承嗣を以って權知淮南軍府事とす。軍吏、巨艦を以って運糧せんと欲す。都知兵馬使徐溫曰く「運路久しく行われず。葭葦が埋塞す。小艇を用いんことを請う。通じ易きにちかし。」軍が宿州に至るに、久雨にあい、重載はすすむあたわず。士に飢色あり、しかれども小艇は先に至る。行密これより溫を奇とし、始めて軍事を議するにあずかる。行密、宿州をせめるも、久しくかたず。ついに糧運繼ざるをもって引還す¹⁰⁾。

とあるように、大運河ルートが未整備のため大船による軍糧補給に問題が生じ撤兵した。そのことに初めて気づいたのが、後に昇州 (金陵) を根據地に選ぶ徐溫であったことに注目しておきたい。

その後、楊行密は民力休養につとめ地方政權を確立することになった。「五代十國」という時代相の始まりである。宋人は、開封の繁華を強く認識していた。それは大運河ルートによる南北の物流を基礎にしている。とすれば、宋人が「亂離¹¹⁾」として批判する「五代」は、「運河ルートの杜絶」がもたらしたといえよう。すなわち淮南・江南の獨立政權が中原國家と對立しつつ共存することなのである。

淮南節度使の治所であり、唐朝の華中支配の中心地であった揚州は、淮南を支配することから出發した呉王國の都城「江都府」となった。905 年に死去

した楊行密は、唐の皇帝により呉王に任命され、唐王朝の中興を掲げ、朱全忠と淮河を挟んで争った。したがって、揚州は呉王國の都城として相應しいものだった。

ただし、大運河ルートが途絶した以上、揚州は交通の要衝としての經濟力を失っていた。楊行密死後、呉國の實權を奪った徐溫は、昇州 (金陵府 現南京) から政治を壟斷する體制を作り上げる。呉王は傀儡となり、揚州の中心性は後退する。かわって金陵が中心性をもつような國家體制が形成され、南唐に移行するのである。

五代末期、南唐と後周との淮南戰役において、南唐は揚州の防衛を放棄し居民の強制避難を行った。占領した後周の世宗は、占領後に州城の規模を周 20 里に整理縮小した (周小城)。これが宋代の揚州城の規模となった¹²⁾。

b. 徐氏政權と「金陵府」

六朝建康城は先述したように隋によって破壊された。唐末の動亂の中で、最初にこの地に注目したのは、張雄とその手下の馮弘鋒が率いる武装集團であった。彼らは、上元縣に據點を設ける。馮弘鋒がリーダーとなった頃には水軍の建設に力を注ぎ¹³⁾、いつの間にか「樓艦の盛、天下に聞こえる」ようになったという。楊行密も馮弘鋒の部下から「樓船に敵せざるを恐るのみ」¹⁴⁾と言わしめているように注目されていた。

890 年ごろには、唐朝は馮弘鋒を招安して昇州刺史に任命する。唐朝は上元縣を州治としてほか 4 縣合わせた昇州を設置したのである¹⁵⁾。昇州では版築が行われ上元縣の城郭が擴大されたという¹⁶⁾が、どの程度の規模であるかは不明である。

馮弘鋒は半獨立の小軍閥であったが、楊行密に投降し揚州に退去する。それに代わり楊行密配下の將軍李神福が昇州刺史となる。楊行密の勢力は、これにより、江南に足がかりと、「水軍」を得たのである。李神福は、鄂嶽行營招討使に任命され西方の軍事勢力との作戦に従事する。李神福は、苦しい戦いに勝利して、荊州と潁州の勢力を撃破し呉の勢力範圍を擴大する¹⁷⁾。この一連の戦いは長江を舞臺とした水軍同士の戦闘であった。昇州に集められていた水軍が用いられていたと考えられる。このようにして呉王國の軍事部門のなかで、水軍の據點として昇州は重要性を増していった。

李神福は潁州制壓直前に、病床につき、揚州で死去した (903)。その後に昇州刺史となった呉の武將秦裴は、906 年に江西地方を併合している¹⁸⁾。秦裴が潁嶽觀察使として潁州に移る¹⁹⁾と、907 年に呉國

の實權を掌握した徐温²⁰⁾は、翌 908 年、「金陵の形勢は、戦艦のあつまるどころ」という認識のもと、昇州刺史となり勢力下に置く。自身は揚州（江都府）にとどまり、昇州には養子の徐知誥（後の南唐建国者）を昇州防遏使・樓船副使²¹⁾（樓船軍使²²⁾）として赴任させた。『南唐書』烈祖本紀には「昇州に於いて戦艦を治る^{つく}」²³⁾とあることから、徐温・徐知誥は、専ら水軍整備の據點として昇州に注目していたのである。後周や北宋との抗争においても、南唐は水軍の軍事力に頼っていた²⁴⁾（後述）。南唐を建国したのち李昇（徐知誥）は、「杉材は豊富にあるが、戦艦建造だけに用いてほしい」と述べている²⁵⁾。依然として李昇が戦艦の建造を重視していたこと、そして、建康には杉材が豊富にあり、造船業を支えていたことが分かる。ちなみに明代の鄭和艦隊も南京の城外の「寶船廠」で作られている²⁶⁾。

912 年には昇州刺史に昇格する徐知誥は義父の期待以上の働きをした。陸游『南唐書』では、914 年に徐知誥は「始城昇州」とある²⁷⁾。その 3 年後、916 年 5 月、城壁は完成（「城成」）する。その際に、徐温は昇州を訪れ、その「繁富」に注目する²⁸⁾。『釣磯立談』には、「城隍浚整、樓堞完固、府署中外肅肅、咸有條理」²⁹⁾と徐温が評価したことを記している。『新五代史』巻 62 には、

徐温は潤州に鎮し、昇・池等六州を以て屬と爲す。温、昇の昇州をおさめるに善政あるを聞き、往きてこれを視るに、その府庫は充實し、城壁が修整さるを見る³⁰⁾。

とある。「府庫充實」とあるが、のちに謀臣として活躍する宋齊丘（912 年には、昇州推官となっている。）をはじめとする儒者、士大夫や廉吏を用いて、民生の安定に努力していたのである³¹⁾。

この時（917 年）、徐温とともに昇州を訪れた陸彦謙は、徐温に京口から昇州（金陵）に鎮海軍節度使の治所を移すことを勧める。徐温はこれに従うことになった。徐知誥は丹精を込めた昇州から轉出することに不満を抱きながらも³²⁾、自らは支郡の潤州に雌伏することになった。陸彦謙³³⁾は徐知誥に代わって、昇州の整備に精勵する³⁴⁾。

（呉王楊涓）政事をみな徐温にゆだね。時に温は鎮海軍節度・内外馬歩軍都指揮使たり。すなわち上元縣において昇州をおき、盛んに幕府をひらく。自らは兵柄を上流に握り、子の知誥らは揚州に居りてもって政をとること、凡十餘年³⁵⁾。

昇州には、徐温の「幕府」（軍事政權所在地）が

置かれた。呉王国はこうして二つの中心都市をもつ特異な體制となった（以後これを假に「金陵體制」と呼ぶこととする）。昇州は徐温の指示のもと、陳彦謙が實務を司り、時人から「江淮は治を稱され」という³⁶⁾。當時すでに、揚州の呉王（楊涓 惠帝）は、「主祭するのみ」という状態となっていた³⁷⁾。徐温の嫡男であった徐知誥が揚州で呉王の監視に當たった（918、彼はその高慢な姿勢から暗殺されてしまい、徐知誥と交替する³⁸⁾）。

楊行密の晩年にすでに、李神福が昇州に駐留し、その水軍の力によって、西方の颯州や荊州に對して、軍事的な優勢を實現したことは先述した。徐温も金陵を水軍據點として注目していた。やがて、徐知誥の都市整備と財政改善に觸發され、金陵の重要性を再認識したのである。徐温の視線が北の中原や、南の兩浙、海外貿易ではなく、長江や支流の贛水をさかのぼる西方、西南方へ向かっていたからなのであろう。この戦略において必要なのは昇州の水軍の力である。

揚州政府が傀儡である「金陵體制」は、大運河ルートが斷絶していることが前提である。そこから長江の南の江東・江西や湖南などへ活路を見だし、特に淮南の鹽と江東・江西の米の交易によって大きな利益を上げたのである³⁹⁾。伊原弘氏は、南京は大運河が寸斷された時に、すなわち唐末、南宋、元末明初に、脚光を浴び都市整備が行われていることを指摘している⁴⁰⁾。卓見といえよう。呉では徐氏の勢力充實、そして呉から南唐への移行において、昇州の地政學的な重要性がましたのである。

「金陵體制」の存續には、淮南を伺う中原國家や江東に關心がつよい呉越との國際關係が安定していることが必要である。徐温が金陵に根據地を置いた 917 年頃、後梁は李存勗から攻撃を受け續けており、淮南への南進どころではなかった。逆に呉軍が、淮河を渡河し穎州を包圍する作戦も行われている⁴¹⁾。923 年に後唐莊宗が後梁をほろぼすと、「大呉國主致書上大唐皇帝」と國書に記し、後唐に従う姿勢を示す。

後唐が前蜀を滅ぼした 925 年は、「金陵體制」にとって危機のときであった。勢いに乗る後唐が上流から侵攻する恐れがあった⁴²⁾。そのため後唐にひたすら屈従する。しかし、莊宗が没落する等の政變で後蜀が自立したりとして危機が去る。明宗時代においても、はじめは「遣使修好」していた⁴³⁾。

呉越とは長年抗争していたが、919 年 7 月には呉軍は、呉越軍を破り徐温はそこで講和する。『資治通鑑』は「これより呉國は兵を休め、民を息める。

三十餘州の民は業に楽しむこと、二十餘年。⁴⁴⁾と評している。昇州の徐氏政權は、戦亂に巻き込まれず民力休養に務めることが可能となった。翌、武義二年(920)に昇州は「金陵府」の府名が與えられている。これは、昇州が江都府(揚州)に匹敵する政治的な地位を擔っていたため、名を正しくしたのである。

3. 徐知誥への禪讓と西都江寧府の建設

a. 金陵遷都計畫と禪讓

唐末以來の軍閥混戦の中で、人民は戦亂と重税に苦しめられていた。そのため徐温・徐知誥は、一種の文治政治を試行していく。その結果として「尤得吳人之心」となった⁴⁵⁾。徐温は、2代目の楊渭(景王)を殺め、楊隆演を傀儡國王として立てている。その過程でライバルを退けており、直ちに篡奪する實力は十分にあったが、踏み切らなかった。

さて、歐陽脩『新五代史』は以下のように李昇の揚州時代の政治姿勢を評價している。

①(李)昇(徐知誥)秉政するに及び、人心をあつめんと欲す。乃ち刑法ゆるめ恩信をすすめる。

②延賓亭をたて以て四方の士を待ち、宋齊丘・駱知祥・王令謀等をひきて謀客となす。士の吳に羈旅する者あらば、皆なこれを齒用す。

③かつてひそかに人をして民間を察視せしむるに、婚喪にて匱乏する者あり。往往これに賙給す。盛暑のとき未だかつて張蓋・操扇せず。左右蓋をすすむも、かならずこれをしりぞけて曰く、士衆なお多く暴露す、我れ何ぞこれを用いん。

④ゆえをもって温ははるかに大政を乗るといへども、しかして吳人は頗る已に昇に歸す。⁴⁶⁾

②徐知誥が駐在した揚州には、少なくない数の中原士人が吳に避難してきていた。かれらを招く施設として徐知誥は揚州に「延賓亭」を作る。士大夫を保護することによって、文治政治を標榜し、士人社会での支持を得ていったのである。①③では、徐知誥が、民生の問題に深い關心を持っていたことが記録されている。そして④で、吳人が金陵という離れたところのいる徐温よりも徐知誥に心を寄せていたことが示されている。

927年徐温が病死して後は、養子であった徐知誥が徐温の實子たちを失脚させて「金陵體制」を繼承する。徐知誥の嫡男徐景通(のちの南唐中主李璟)が揚州に常駐し吳王を掣肘した。

徐知誥も禪讓をうけることに對して、慎重であり苦惱していたことが史書には記されている。「吳王失徳なきをもって、おそらくは衆心悦ばざらん」とのべ、次世代に委ねようという弱氣な發言も記録されている⁴⁷⁾。重要なのは「衆心」(吳國人の集合意識)だった。

933年、謀臣宋齊丘の提案を受けて、揚州の吳王を金陵府に移し様子を見ることになった。遷都である。そのための準備が金陵で行われた。金陵の中央に建造された府衙を宮殿とし、徐知誥の治所を別に建てることになった。この際に、用地として利用されたのが六朝時代の臺城の遺址(古臺城)である。五代金陵の城内東北部に位置していた。史料には「徙都統府于古臺城、…都統府成。凡二千四百間、環一千五百歩」⁴⁸⁾とよな廣壯な施設であった。一つの城郭内に二つの中心を置くことになるのであるが、ここにも野望が透けて見える。「環一千五百歩」とは周圍が約2.34キロメートルということになる。南唐時代の宮城(約2.7キロメートル⁴⁹⁾)に匹敵する廣大な區畫であった。權力を可視化するとともに、實務的にも必要だったのであろう。

徐知誥は新しい治所に引越しを済ませた⁵⁰⁾。翌934年の2月に遷都が豫定された。ところが、「吳人」が遷都に反對しているという周宗の意見⁵¹⁾が飛び出し、遷都は中止となった。ここでも世論を重視する徐知誥の慎重さが強調されている。

徐知誥は48歳になった。既に白いものが混じったひげを鏡に見ながら彼は嘆息したという。これを見た周宗は揚州に赴いて、ついに吳王に禪讓を促した。しかし謀臣宋齊丘は、「天事人事」からしてまだ不可であると主張し、李昇は實行に至らなかった⁵²⁾。この事件の直後、金陵で火事が多發し徐知誥は、府衙にて「勒兵自衛」⁵³⁾したという。史書には明記されていないが、何らかの陰謀があったかもしれない。吳の王族臨川王楊濛が武器を蓄えていたということで幽閉されている。

翌年935年、徐知誥は、太師、天下兵馬大元帥、齊王の地位につき、昇、潤、宣、池、歙、常、江、饒、信、海の十州を領土とする齊國が建てられた⁵⁴⁾。936年、金陵に大元帥府が設けられ、六部と鹽鐵使が設置される。金陵に百官がおかれ、西都とされた⁵⁵⁾。さらに、荊南や閩、吳越などから、徐知誥が帝位に就くべきとやってきた。揚州では「吳宮多妖」という現象が発生し、それを禪讓への天意という解釋が大勢を占める。この直後の、閏11月に、石敬瑭が後唐を滅ぼし後晉を建てる。12月には中原か

らの亡命者が金陵に至っている。これを契機に、徐知誥への禪讓をもとめる「勸進」の聲が再び強まった。「勸進」のため金陵を訪れる「衆」のなかには、呉の宿將周本もいたという⁵⁶⁾。937年1月、金陵府は江寧府と改稱される。宗廟、社稷を立て、牙城を宮城とする。937年10月、徐知誥は禪讓を受け、「大齊」皇帝⁵⁷⁾の地位に就き、昇元元年とされた。

揚州を東都江都府とするが、しかしそのときには、揚州から呉王一族は泰州に幽閉され、揚州は名目的な陪都としての存在となる。すなわち、この體制變換の過程は、都城史からは、揚州から金陵への中心移動の最終段階である。

b 江寧府の都城空間（六朝建康からの移動）

徐知誥は徐温の養子になる前の姓が李であったため「李昇」と改名し、唐朝皇室の末裔であると稱する。この「復姓」をうけて「大齊」はわずか一年餘りで、「大唐」と國號を改めることになった（昇元三年（939））。後唐の滅亡という事態（936年）を受けてのことであろう。これまで善政による「衆心」の獲得に務めていたが、更に血統によって大唐中興の名目を掲げ正統性を擔保することを企圖したのである。

金陵府は江寧府と改稱され、長安や洛陽を受け継ぐ唐朝の都城となった。江寧の都市空間が政治空間・儀禮空間として、南唐の正統性の確保に用いられた。早速、太廟において改制が行われる。建國と同時に設けられた、齊國の太廟の太祖は徐温だった。しかし、復姓し唐朝を受け継ぐことをかかげたため、太祖は李淵となり、徐温は異例ながら「義祖」として、太廟に一室が當てられることになった。

〔楊國慶、王志高 2008〕『南京城牆志』は、これまでの考古發見の成果をまとめたものである。これ以降も新發見は期待され、より詳細な復元が出現する可能性は高いが、現在のところ、112頁掲載の「南唐都城位置、布局示意圖」が基本的な復元圖となる。中央宮闕型であり、南北中軸線街路を中心に東西に廣がる、典型的な中國都城のコンセプトを持っていた。本節では、都城史、あるいは比較都城史の觀點から、この都城の問題を検討してゆきたい。

昇州（金陵）は唐末五代に節度使の會府として整備された。したがって、隋の大興城や元の大城北城のように最初から、都城として作られたわけではない。南朝建康のプランを踏襲したところは見当たらない。逆にいうと隋による破壊をうけて都市區畫ではなくなっていたため、建設者達は、あたらしい都市計畫を定めることができたのである。

『景定建康志』卷20、今城郭には、

建康府城、周二十五里四十四步、上闊二丈五尺、下闊三丈五尺、高二丈五尺、内臥羊城、闊四丈一尺、皆偽吳順義中所築也⁵⁸⁾。

と城壁の築造について觸れる。この史料では、城壁が築かれたのは、順義中（921年から927年）である。『景定建康志』の下文には、

六朝の舊城は北あり、秦淮を去ること五里。故と淮上にはみな浮航^{うきはし}を列す。緩急ならば則ち航を徹し備えとなす。呉は淮に沿いて柵を立つ、前史のいわゆる柵塘これなり。楊溥の時（920年~937）に至り、徐温改築し、やや近南に遷し、淮をはさみ、江をめぐらし、もって地の利を盡す⁵⁹⁾。

とある。この部分では呉の國王が楊溥だった920年~937年に、徐温が「改築」したとされている。ただし、徐温は927年に死去している。

『資治通鑑』卷278、長興3年（932）8月甲子（中華書局1964、9076頁）には、

吳徐知誥廣金陵城周圍二十里

ともあり、徐温が死去してから、徐知誥が金陵（昇州）に戻ってのちにも城壁の工事は行われているようである。徐温や徐知誥が政治的な實權を昇州で掌握していたから、この時期の城郭擴大は、政治的な中心性を意識しての都市計畫だったと思われる。

前掲の『景定建康志』に見える都市計畫のポイントは、六朝の建康より南に城域を移動し、秦淮河の屈曲部まで城内としたことである。その背景として注目されるのが、近年明かになった、長江河道の西への移動である。六朝の長江東岸（上流から見て右岸）は、現在の西城壁（南唐も同じ）よりも東側にあったことが、2015年の發掘調査により明らかにされている。南唐の西城壁のあたりは長江の河道だったのである。六朝時代は、江水の逆流もあり、秦淮河の川幅は現在よりも三倍強の幅を持っていたという⁶⁰⁾。したがって朱雀橋は、約140メートルの船橋だった⁶¹⁾。

六朝時代の秦淮河には、多くの浮橋がかかっており、有事においてはそれを撤去し、河岸には柵を設け敵に備えたのである。しかし、長江河道の變化によって、五代には秦淮河は、30メートルほどの幅員になっていた。防衛上の役割を果たすことは難しいため、秦淮河を城内に取り込め、長江舊河道を城壕とし東岸に城壁を築き、秦淮河の流出部に下水門（西水門）を設けている。このように秦淮河と長江の新しい關係を計算して城郭プランが練られたのである。

長江河道の西移にしたがって、秦淮河の河口と長



江の本流との間には、廣大な中洲（白鷺洲）が形成される。秦淮河の水流も水害防止のための放水路（外秦淮）を設置したため細くなった（後述）。なお、唐代長江沿岸には李白が友人らと酒を飲み交わした酒樓（孫楚酒樓）があったといわれている⁶²。李白らは、酒樓から船に乗って石頭城の友人を訪問している。このように、唐代には、六朝時代の中心地は荒廢していたが、長干里には繁華街が復活していたと考えられている⁶³。それを城郭内に入れたのである。

西水門は、物資集散の場として明清時代に榮えたことでも知られているが、南唐時代から、交通・商業の要地となっていたのであろう⁶⁴。白鷺洲は、北宋が金陵を攻略する際の激戦地となっており、勝利した宋軍は南唐の軍船 50 隻を手に入れている⁶⁵。明代に鄭和艦隊を造船する寶船廠があったのも白鷺洲に近い長江の中洲であった。ここに南唐水軍の工廠や水軍基地があったのであろう。港灣としての機能は、西水門外の周圍に遷り、狭くなった城内の秦

淮河兩岸（長干里）は西水門から持ち込まれる物資をさばく商業地區として發展したのであろう。

城壁南側の城壕は、六朝時代には死馬澗とよばれていた小河川を改造し、秦淮河から水流を入れて水量を増したものである。先述の水害防止の放水路である⁶⁶。この城壕は、外秦淮河とよばれるようになった⁶⁷。元の秦淮河（内秦淮河）の幅員の減少の背景にはこの問題も關係しているのである。

以上のように、隋による人爲的な破壊ののちに發生した長江河道の西方移動という自然の變化は、徐温・徐知誥らの金陵建設に大きな影響を與えたと考えられる。

c. 宮城と德昌宮

南唐の都城となるにあたり、「金陵使府」が宮城とされた⁶⁸。ただし、遷都計畫によって吳皇帝の宮殿として整備されていた「使府」は、既に宮殿としてのたたずまいを與えられていた可能性は高い。史書では、「使府」の正殿に天子の宮殿として鷓尾・欄檻を増設しただけで、土木工事を施さなかったと

する⁶⁹⁾。それは、土木工事によって民を使役しない「民力休養」の政治姿勢を示す情報操作だったのであろう。

とまれ、江寧府の宮殿の規模は（北宋の開封がそうだったように）、節度使會府の治所のものであり、周囲約 2.7 キロメートルにすぎない。また、隋唐長安城のように、皇城という官廳街に特化した空間は設けられておらず、官衙や太廟・社稷などは居民空間と隣接している。

臺城遺址（古臺城）は宮城の東北に位置していた。先述したように呉の王室を金陵に移動させる遷都計畫の際に、廣壯な李昇の使府あるいは居宅が設けられている。「一千五百歩」（約 2.34 キロメートル）の區畫を占めていたことは先述したとおりである。南唐が建國されると、この施設はどうなったのであろうか。一時的にでも李昇が居住した施設であるので、特別な扱いを受け「宮」をもってよばれたようだ。『江南餘載』巻下には、

德明宮は、もと南唐烈祖の舊宅なり。後苑の北にあるは、即ち景陽臺の故址なり。太湖石の特に奇異なるものあり。數十人にあらざれば運致するあわず。即ち陳後主の假山の遺址なり⁷⁰⁾。

とあり、六朝の遺物を利用した豪華な建造物であったことを伝える⁷¹⁾。「德明宮」という宮名はこの史料のみに見える。これに對し、「德昌宮」という宮があったことを伝える史料は頻出する。そのうちのもっとも早いものが、北宋景德年間に知昇州となったある官僚の墓誌銘（晏殊選）である。

牙城の東北、もと僞朝德昌宮の地なり。後庭に鉛粉おしろい往かつてここにあり。公は日えらび徒をあつ広め、神によりて禱を致し、次表丈を掘り、汞すいぎん二百餘斤を得る。これを鬻りて緡百萬を獲、以つて供帳に備うも、綽然としてあまりあり⁷²⁾。

とある。ここでは、「牙城」の東北に「德昌宮」があり、その庭で採掘された水銀 120 キログラムを販賣し財用の不足に當てたという。陸游『南唐書』巻 1、李昇本紀、5470 頁には、李昇の後繼者李璟に對する遺言を載せるが、その中に、「德昌宮、儲戎器金帛七百萬」とある。この宮殿は國庫として用いられたのである。

「德昌宮」を宮城内の區畫として考えている研究者もいるが、「宮」字を用いる以上、宮城内に存在することはしっくりしない。唐長安では三つの宮が獨立して存在する。北宋開封では、龍德宮など宮城

の外にいくつもの宮（道觀）がある。德昌宮を、「内帑別藏」⁷³⁾あるいは、「外府」⁷⁴⁾とする史料も見られる。宮城外にある「内藏庫」と考えることができるのではないか。『大明一統志』巻 6 には、

南唐は即ち金陵府を建てて宮となす。外にまた德昌宮を建てる。金帛と貨泉はみなここにあり。⁷⁵⁾

とあり、南唐の宮城の外に、德昌宮が建造されたと記述する。

宮城外の東北の「宮」にふさわしい施設というのと、それは『江南餘載』で「德明宮」とされていた徐知誥の使府に行き當たる。「明」は「昌」の訛傳という可能性があろう。そもそも節度使府として作られた宮殿であるので、城壁などの防御施設も充實していたであろう。南唐の莫大な國富を貯藏する空間としてもってこいの場所といえよう。徐知誥が一度は屋敷として住んだ建造物であるため、潜邸だからこそ宮號が與えられたのである⁷⁶⁾。宮城と德昌宮が並び立つことがこの都城の平面プランの特徴だったのである。

なお、2009 年、南京市碑亭巷で「德明宮」とされる遺構が発見されている。碑亭巷は、舊南京總統府⁷⁷⁾の西側約 100 メートルの小路である。同年 7 月に發表された新聞記事（電子版）によって発見の様子を知ることができる⁷⁸⁾。

d、御街の傾斜と郊祀（六朝建康との比較）

御道（現在の中華路）の東西に市街地が廣がっており、これを南北中軸線と見なすことができる。ただし、中華街を GoogleEarth で計測すると、眞北から約 15 度程度、東にかたむいている。明代の中軸線は 6 度傾斜している。現南京市の城内の街路をみると、近代以降の道路は、傾斜がない。つまり、道路の傾斜は道路や沿路區畫の歴史を知る手がかりとなるのである。南唐時代の城郭範圍には、同じ角度で傾いた南北街路がみられる。これは南唐の金陵が、計畫都市であったことを意味してはいないだろうか。

秦淮河の V 字型の屈曲部に鎮淮橋を架橋される。そこから府衙南門から直線道路を設定するとどうしてもこの程度の傾きとなる。この傾きは東西の城壁のラインにはほぼ等しい。西城壁（城壕）は、長江によって規定されるので、このラインが都市プランの出発点だったと考えられる。直線道路は、城外の聚寶山までのびている。そこに南郊壇が設置された。

近年の考古學的発見によると、六朝の建康では中軸線街路を含め多くの街路が東側に約 25 度傾斜していたという⁷⁹⁾。張學鋒氏は、朱雀橋と牛首山（牛

頭山)を結んだ延長線上に、宮殿(臺城)が置かれたことにその原因を考えている。六朝(劉宋孝武帝時代)では牛首山が聖なる山とされ南郊壇が設置された⁸⁰⁾。東晉南朝が苦勞したのは、儒教の定義では、洛陽こそ「土中」であり都城なのである。そこで複雑な經典解釋のすえに、建康を正統な京師とみなすことになった⁸¹⁾。長安や洛陽のような華北の都城が眞北を基準として都市計畫が行われている一方で、建康と金陵では傾斜した中軸線を基準とした都市計畫が用いられた。南唐では衆寶山、六朝では牛首山を起點とし、更に秦淮河のV字型の灣曲部を中心として都市計畫を成立させたからなのである。南方の山嶽を都市建設の基準とする意圖が働いたのである⁸²⁾。

宋元人の詩にも讀み込まれている南郊壇⁸³⁾であるが、現在にいたるまで位置は確認されていない。明人による復元圖(陳沂『金陵古今圖考』⁸⁴⁾)では、聚寶山の東方に南郊壇が描きこまれている。これに従うと南郊壇は、都城南門(國門)の東南巳の方角に設置され、禮制にも合致する。徐知誥は、大唐皇帝李昇となった年に、南郊壇で天子として南郊儀禮を実施している。都市計畫そのものが、即位儀禮を実施するプランの一環だったのではないか。

昇元3年(939)4月、唐朝皇帝となった李昇は南郊儀禮を実施する⁸⁵⁾。まず太廟にて先祖に郊祀の実施を報告する。李昇は4月庚辰、太廟にて「朝享」を行い一夜を過ごした。翌日、辛巳、皇帝の行列は御街を南に進み、郊外にでて南郊壇にて儀禮を厳かに実施し即位を天に報告する。儀禮終了後、4月癸未の日、宮殿に戻った李昇は宮殿の正南門(端門)から大赦を天下に發出した(端門肆赦)⁸⁶⁾。

大街がT字型に交差する宮殿正南門前の廣場は皇帝が大赦を行う空間だった。南方へ向かう大街は、「御道」「御街」と稱されるようになり、その沿路に官街が軒をつらねるだけでなく、京師に特有の南郊行路として整備されることになった。南宋の地誌には

實録：朱雀門は、北のかた宣陽門に對す、相い去ること六里、名づけて御道と爲す。御溝を夾開するも、としひさしく湮塞す。今の宮城以南、御街が兩邊に、ともに溝の居民の屋下に在るものあるは、乃ち南唐の開くところなり。六朝の舊跡にあらず⁸⁷⁾。

とあり、御街の兩側には、御溝が設けられていたこともわかる。南郊に對して北郊は、玄武池付近に設置された⁸⁸⁾。

e 象徴としての都城空間

注目したいのは、この南郊祭祀に對して、契丹をはじめとして呉越、荆南、後蜀、高麗と多くの國から慶賀の使節が金陵を訪れていることである⁸⁹⁾。天にだけでなく、天下に伝えられた。一方、936年に即位した後晉の高祖は天からでは無く、契丹君主から皇帝に冊封されていた。契丹に南郊儀禮を行うことを許可してもらったが、結局実施には至らなかった。都城の開封には実施する施設と論理がなかった。

金陵を訪れる諸國の使節は、都市の繁華に目を奪われたことだろう。城壁の規模(周圍25里)は、舊城(周圍20里)のみだった當時の開封よりも廣大であった。南から近づく水平の方向からは、東側に伏龜樓、西側に昇平塔(南朝時代より受け継がれた高塔)がランドマークになっており、訪問者にアピールした。外秦淮河を渡って南門を通過して、鎮淮橋を渡りながら、秦淮河の下流を見たとき、沿岸に広がる商業地帯が目に入ったことだろう。そこには江淮各地からの物資が集積されていた。北に進むと御街の兩側には、官廳街が軒を連ねる。

そして、宮殿正南門や正殿の臺に設置されている鷗尾は天子の居所を示していた。さらに、宮城東北の古臺城に建設された徳昌宮はこの國の國富の豊かさを象徴していた。金陵を訪れた諸國の使節⁹⁰⁾に正統性をその景觀によって主張することになったのである。

李昇は文治主義を標榜し民力休養につとめた。戦時の臨時課税はやめられ、農業振興が計畫された。太學を建設し禮樂を定めるように命令する⁹¹⁾。昇元6年(942年)9月に昇元格の制定により、刑罰の輕減が圖られた。李昇は932年2月金陵に揚州の延賓亭にならって、禮賢院を建て、廣く圖書をあつめ、士大夫を招いた。これは、武斷的な政治を改め文治政治を行う基本方針を示していた⁹²⁾。五代十國隨一の宮廷圖書館も設置された。ここにあつめられた數萬卷の書籍は、やがて開封に運ばれ、宋朝宮廷圖書の基礎となったのである。太學・國子監は、城内東南部、内秦淮河の北岸に設けられた⁹³⁾。この場所はその後文教施設(江南貢院など)の用地として用いられている。

なお、秦淮河と汴河という運河を城内に入れるという點は開封と共通している。これは、都市の物資流通を飛躍的に高める効果をもった。商業都市と政治都市の結合である。(開封でも汴河沿岸は、長干里のように繁盛した商業地區となった。)このように南北の都城は同じコンセプトを持っていたのである。古代の都城が皇城・宮城の威容によって人々に

權威を伝えるものだったのに對し、宋人は、開封の都城空間の經濟的そして文化的な繁盛をもちいて皇帝の徳を可視化するという意識を持っていた⁹⁵⁾。上に述べてきた金陵についても同じように捉えることができないだろうか（例えば富の象徴である「徳昌宮」）。黄巢の亂以降、唐末の混亂の中で生まれた身分制秩序の崩壊と新しい社會の形成をこの金陵の都市空間に見る必要がある。先述した李昇の人材登用方法は能力主義であった。坊城制による住民のすみ分けがない「近世都城」の始まりだったのである⁹⁵⁾。

宋人（歐陽脩）によって規定された「五代十國」という史観は、中原國家を北宋が繼承したことによるものである。「五代」として一貫した王統として表現されるが、その政權交代は、軍事クーデターによる政權交代であった。翻って、李昇によって行われた楊呉から南唐への禪讓劇は、非暴力的に「衆人」の世論を意識した長期間にわたる運動の結果として行われている。そして、揚州・金陵の複眼的な國家體制から、江寧府への集權化、文治主義、南唐への改稱と李昇の復姓によって、唐朝の正統を主張した。金陵は「王氣の地」として知られるが⁹⁶⁾、李昇により復興され都城にふさわしい莊嚴が行われた。金陵における郊祀と大赦は一連の南唐建國運動の總決算として位置づけられるイベントであった。江寧府を「京師」として意識させるための行事だった。

4. その後の南唐政權と江寧府

a 李璟（中主）の江寧府での工事

唐朝を稱した李昇であるが、唐朝の版圖を回復する、すなわち北方計略には消極的であったとされている。『新五代史』南唐世家には、

昇、天下の亂れること久しきをみて、常に用兵を厭う。・・・昇の志は呉の舊地を守るに在るのみ。また經營の略なきなり。しかれども呉人もまた頼むに休息をもってす⁹⁷⁾。

とある。歐陽脩がいう「經營の略」とは、「天下とりの戰略」を指すと思われる。確かに李昇には北伐による天下平定を考えた形跡はない⁹⁸⁾。ただし、『資治通鑑』には、「(天福 2 年 937) 五月、吳徐誥、用宋齊丘策、欲結契丹、以取中國。遣使以美玉珍玩、泛海修好、契丹主亦遣使報之⁹⁹⁾」とある。宋齊丘の策を採用し、契丹と連携して中原進出を計畫したことが記されている。この策は、7 月には禪讓へのプロセスが開始されたため、沙汰止みになったようである。宋齊丘は李昇の謀臣として知られているが、禪讓後は廟堂に立たなかった。對外政策を巡って李

昇と宋齊丘で意見が合わなくなっていたのである。

943 年の烈祖李昇の死後に即位したのが、元宗李璟（景）（中主）である。李璟のもとでは、李昇とは違う政治姿勢が目立つようになった。宋齊丘が復権したこともあり、充實した國力を背景にして、對外政策では積極的となり、閩や楚への出兵が行われた。一時的には成功し（945 年に閩、951 年に楚をそれぞれ滅ぼす。）、形の上では南唐の最大領土を形成したことになる。しかし、領土擴大後の占領地行政に失敗し、多くの兵と戦費を失った上、撤退を餘儀なくされている。

946 年に、後晉が崩壊し、開封にて契丹主耶律德光が大遼皇帝に即位する¹⁰⁰⁾。しかし、數か月で開封から後晉皇帝を引き連れて撤退したため、「中原無主¹⁰¹⁾」という状況が現出する。契丹とは先述した徐知誥との盟約があり、使者を交換するなど友好関係をもっていたため、南唐には中原進出の勧誘もあった¹⁰²⁾。中原からの避難者である石熙載は、「陛下有經營天下之志、當在今時」と上言している¹⁰³⁾。実際に耶律德光の死が傳わると、「中原を眷^{おも}うに、本朝の故地なり」と詔勅が發せられ、「北面行營招討使」（北伐軍の司令官）も任命された。中原回復に動いたのである。ただし、迅速に劉知遠が開封に入り事態を收拾したため、出撃にまでは至らなかった¹⁰⁴⁾。

以上のように活潑な對外擴大が試みられた李璟時代には江寧府の宮殿にも手が加えられた。『續資治通鑑長編』によると、北宋仁宗時代（慶曆 8 年）にこの宮殿が焼失してしまう。その際の資料には、「李景、江南にありて、大いに宮室府寺を建つ、その制みな帝京に倣う¹⁰⁵⁾」とある。宋人の見たところ、江寧の宮室は「帝京」に「倣」ったものだったという。宋人の帝京とはやはり開封のことだろうか。しかし、仁宗時代人である司馬光の筆記では、後周世宗の段階でも開封には「王者之制」がなかったという¹⁰⁶⁾。一方、江寧府はこのとき既に、「帝京」の制をもっていた。宋太祖は開封の宮殿に李煜を迎えようとしていた。だから江寧の宮殿よりも劣った状態ではうまくない。「洛陽之制」を取り入れて改造したのはこのためであろう。建康の宮殿の方が先行して「王者の制」をもっていたのである。すなわち「帝京」とは、唐末に再建された洛陽宮のことと推測される。先述したように南唐には中原の動亂をさけて多くの士大夫が亡命してきていた。かれらより洛陽宮のプランは知ることは可能だったと考えられる。以上の

推測が成立するとすると、江寧府と宋の開封府は、ともに五代洛陽宮にならった宮城だったといえるのである。

李璟の宮殿修築についてはそのほかにもいくつかの点を指摘できる。たとえば、日常の政務に使用していた延英殿に隣接して「千春閣」という廣壯な殿閣が作られ、李璟が題書したという¹⁰⁷⁾。『景定建康志』には、「於宮中作高樓、召群臣觀之。衆皆嘆美。」とある¹⁰⁸⁾。この高樓は、「百尺樓」と稱されているものである。百尺とは、30メートルほどの高さである。楚を滅ぼした時(951)には、「湖南の金帛・珍玩・倉粟の屬および舟艦・亭館・花果の美に至るまで」を皆金陵に運んだという¹⁰⁹⁾。それは、その後、占領地に課された重税とあわせて湖南人の不評を買い占領地行政に失敗してしまう。

城壁も李璟時代に増築されているようだ。陸游『老學庵筆記』には、

建康城、李景所作。其高三丈、因江山爲險固。其受敵惟東北兩面、而壕塹重複。皆可堅守。至紹興間、已二百餘年所損不及十之一¹¹⁰⁾。

とある。先引の『景定建康志』では、徐温の時代の造営とされているが、陸游は李璟時代に造営されたとする。『資治通鑑』などには、後周世宗との講和後、世宗から勧められて、金陵城壁の營繕が行われたという記事がある¹¹¹⁾。これによって財貨を使わせようとしたのであろう。いずれにせよ、陸游の指摘するように李璟の時にも、城郭の修築が行われたのである。堅さは十分なもので200年が経過した紹興年間でも壊れているところは少なかったという。

b 大運河の開通

後周の世宗が南唐と戦端を開いたとき、李璟は水軍を待みにしていた。後周は水軍がないから、長江まで進出できないというのが南唐の判断だったのである¹¹²⁾。しかし、後周軍は淮北で捕虜にした後唐の兵士を使って戦艦数百隻を作り、水軍を養成した。「齊雲船」という大きな船を100隻つくり、淮河流域を経て長江にいたった。それを見て南唐の政府は淮南割譲による講和に同意したという¹¹³⁾。李璟は、後周との講和してから、帝號を廢し、後周への國書には「唐國主臣景」と署名した。「璟」が後周の國諱に當たるため改名したのである。

本稿では江寧府(金陵・昇州)が水軍の基地として中心地性を獲得したことを述べてきた。長江水軍の軍事力は江淮地區を地域的に結合させた。そして、大運河の切斷は中原から自立を意味していた。

ところが、その水軍の優位性が崩れた。また淮南(鹽)と江南・江西(米)の地域の經濟的な相互補

完による南唐の經濟體制が失われた。これらは南唐の崩壊すなわち五代十國の終焉の始まりとなった。大運河交通は、世宗の部下の手によって回復される。開封では、「淮浙巨商」¹¹⁴⁾を迎えるため、邸店や運河に沿った竝木などが設けられ、「都會の壯をなした」という。「淮」南だけではなく「浙」も加えられていることに注目すると、呉越の商人もこの大運河を使ったということであろう。

開封は禁軍(消費者)の増大と、經濟圏の擴大による交通商業の發展に伴い、世宗時代に40里に及ぶ外城が建設されることになった。一方、國境線が長江になったことを恐れた李景は、人々の反對を押し切って、洪州(南昌府、南都)への遷都を行った。西都江寧府には、太子李煜が留守として駐在した。961年3月、長大な艦列が、長江と贛水を遡った。しかし洪州では都城としては狭苦しいため、李景や群臣は、江寧府に歸ることを望んだが果たさず、6月李景は病死してしまう。

c 江寧府の陥落と洛陽での郊祀

北宋が南漢を滅ぼした971年(開寶5年)、後主李煜は唐という國號を「江南」としている。江寧府宮殿では鷓尾が下ろされ、京師としての象徴性が廢された¹¹⁵⁾。

さて、974(開寶7年)秋、李煜に對し、開封で行われる南郊祭祀への参加が求められた。李煜は病氣だといって斷わる¹¹⁶⁾。先に、荊南の高繼沖は、辭官納地した上で開封での郊祀に参加している。この前例から推して江南國に納地を求めたのであろう。李煜の拒絶は、北宋に軍事侵攻の口實を與えることになった。

宋軍は、11月、長江の采石磯に巨大な浮橋を設置して一気に渡河している。この前代未聞の作戦は、長江の天險を頼りにしてきた李煜に大きな衝撃を與える¹¹⁷⁾。翌975年(開寶8年)2月、金陵の關城を宋軍が抜き、江寧府での攻圍戦が開始された。白鷺洲で南唐軍は敗北し、長江からの補給も不可能になった。ただし、これより、11月までの9ヶ月間にわたってこの攻圍戦は繼續したのである。これは、李昇と李景の時代に造営された江寧府城壁・城壕の堅固さの證明であろう。徳昌宮の貯えも有効的に使われたのかもしれない。

李煜のもう一つの頼みは、やはり水軍である。6月、南都(洪州)に集結していた水軍15萬が江寧府の危機を救おうとして出動し、采石磯の浮橋を焼こうとした。しかし、まちかまえていた宋の水軍によって敗北してしまう。

11月、食料がつかない江寧府に對して總攻撃(「百

道攻城」¹¹⁸⁾が行われた。宋軍と呉越軍が城内に侵攻する。特に呉越軍は、多数の住民が避難した昇平閣に放火し、数百人が犠牲になったとされている。同月乙未、李煜は降伏し、開封に連行されることとなった¹¹⁹⁾。

翌年の正月辛未、太祖は李煜と開封で會見する。太祖はこの直後に西京河南府（洛陽）に行幸して南郊儀禮を実施する。まず経路に当たる鞏縣の安陵（太祖の父、趙弘殷の陵墓）を參拜し、江南平定の報告を行う。更に西方の洛陽に行幸し、その南郊で「上天」に報告したのである¹²⁰⁾。この南郊祭祀は異例なものであった。既に開封で数回の郊祀を行っていたのにわざわざ洛陽で行った。しかも、本来は冬至に行われるところであるが、4月に実施している。これは南唐の降伏が年末になったため、冬至には実施できなかったからである。

拙稿ですでに詳述したところではあるが¹²¹⁾、洛陽行幸・南郊には多くの反対があったことが、記録されている。兵食が續かないこと、夏での実施であり暑さが心配されたことなど、それらの反対意見はそれぞれ説得的である。それにもかかわらず、太祖趙匡胤は、ことごとく退け、洛陽に向かった。

南郊は天への報告であると同時に、全国各地で宣讀される大赦「赦文」を媒體とする天下への情報傳達であった。この南郊は異例のものである。多くの反対をおしきって強行した。大運河の途絶から始まった、「五代亂離」が終結したことを上天と天下に傳達するには「天下の土中洛陽」がふさわしい。このような、政治的な意味を考えた故であろう。江寧府の獨立政權を消滅させたことは、南漢や蜀などを征服させる以上の意味があったのである。今だに敵對している北漢に對する示威の役割もあったと考えられる。

5. おわりに

本稿では、華北の勢力と華中の勢力が拮抗し、兩淮にて大運河が寸斷された南北對立の圖式が、「五代十國」の時代相の始まりと考えた。その後、成立した呉王國が、江南進出の據點として整備したのが、昇州（現南京）であった。江南・江西・湖南への勢力拡大をはかる中で、まず長江水軍の據點としての昇州の重要性が注目されたのである。

大運河の寸斷に氣づき、昇州の重要性に注目したのは、呉王國の實權を掌握する徐温であった。かれは昇州を政治軍事の據點とし、揚州（江都府）の呉王を傀儡とする。昇州は金陵府と改稱され都市整備が進んだ。この事業を手がけたのが後の後唐の建國

者、徐知誥（李昇）であった。

隋によって破壊された建康とは異なった都市計畫によって、昇州・金陵府は建設され、南唐建國後、江寧府と改稱された。この都城の都市構造などについて、本稿では以下の諸點を論じてきた。

1. 六朝から五代にかけて長江の河道が移動し、それに対応して六朝建康と五代の金陵では平面プランが移動したこと。
2. 繁華な秦淮河屈曲部を城内に取り込んだこと。
3. 郊祀を行うための都市空間構造の整備。
4. 五代洛陽の制にならった宮城。
5. 六朝臺城の遺址に建てられた徳昌宮とそこに蓄えられた富など。

南唐の李昇は、同時代の後晉・後漢では行われなかった郊祀を親祭でおこない、契丹や高麗、呉越、南漢などからも慶賀された。當時の南唐の勢力は中原國家をしのぐものになっていたと考えられる。それを象徴する都城空間が江寧府として結實したのである。規模としてはやや小ぶりであるものの、唐王朝最後の都城である天復修都後の洛陽の宮城制度に倣ったことをはじめとして、正統王朝の都城にふさわしい南北中軸線街路（御道）と莊嚴な景觀を備えていた。これは、後周の世宗の開封と比較しても劣るものではなかったのである。そして、李昇が後繼者に残した莫大な富は、徳昌宮という廣壯な建造物におさめられ、富裕な大國南唐最盛期の象徴となったのである。

以上のように、後唐滅亡後に成立した南唐は、唐の中興を掲げたことからわかるように、中原國家に對抗する正統性への志向と国力を持っていた¹²²⁾。しかし、中主政權は領した閩・楚の統治に失敗して国力を消耗した。逆に中原政權によって淮南を奪われ、大運河ルートによる南北の物流が復活する。そこで南北のバランスが變化し、中原國家による統一に至ったと考えられる。

【参考文献】

- 愛宕元 1997『唐代地域社會の研究』同朋舎、「華中編 第2章 唐代の揚州城とその郊區」
- 安藤更生 1980『鑑眞大和上傳之研究』「外篇 唐宋時代における揚州城の研究」平凡社。
- 伊原弘 2020『宋代中國都市の形態と構造』、「第3章 宋元代の南京城」勉誠出版。
- 久保田和男 2016「宋代開封における公共空間の形成」『宋代史から考える』汲古書院。
- 久保田和男 2018「五代・北宋における都城洛陽の退場—中國都城史の轉換點によせて」『東洋史研

- 究』第76卷第4號
久保田和男 2019 「五代十國」と南郊儀禮『東方學』137輯
- 小嶋良一 2020 「鄭和西洋下りの寶船に関する一考察」日本船舶海洋工學會講演會論文集 第30號
- 佐川英治 2016 『中國古代都城の設計と思想』第7章 中國都城史上における六朝建康城の位置づけについて
- 戸川貴之 2015 「東晉南朝における天下觀について」『東晉南朝における傳統の創造』汲古書院 所收。
- 鳥谷弘昭 1986 「南唐の文治主義について」『立正史學』第59號
- 西川正夫 1959 「吳・南唐兩王朝の國家權力の性格」『法制史研究』9號
- 松田光次 1985 「遼と南唐との關係について」『小笠原宣秀博士追悼論文集』龍谷大學東洋史研究會。
- 山崎覺士 2010 『中國五代國家論』思文閣出版
- 八木章好 2008 「楚狂」と狂夫：李白と杜甫の「狂」について『慶應義塾大學日吉紀要．言語・文化・コミュニケーション』No.40
- 郭黎安 1984 「秦淮河在南京歷史上的地位和作用」『南京師範大學報(社會科學版)』1984-04
- 劉浦江 2010 『正統與華夷 中國傳統政治文化研究』中華書局
- 任爽 1995 『南唐史』東北師範大學出版社
- 石尚群 蟠鳳英 繆本正 1990 「古代南京河道變遷」『歷史地理』第8輯・1990年第2期
- 汪明玥 2020 「南京城牆東水關、西水關の歷史沿革及保護利用」南京師範大學 2020年、文物與博物館碩士學位論文
- 薛政超 2011 『五代金陵史研究』中央編譯出版社
- 許志強 2021 「六朝建康長干里考略」『都城圈與都城圈社會研究文集--以六朝建康爲中心』南京大學出版社。
- 楊國慶・王志高 2008 『南京城牆志』鳳凰出版社
- 張學鋒 2021 「近世都城的出發--以南唐金陵爲例」『都城圈與都城圈社會研究文集--以六朝建康爲中心』南京大學出版社
- 張學鋒 2012 「(小尾孝夫譯) 六朝建康城の研究—發掘と復元」新宮學編『山形大學歷史・地理・人文論集』第13號、『近世東アジア比較都城史の諸相』白帝社、2014に再録。
- 鄭滋斌 1997 『陸游『南唐書』考釋及史事補遺』文史哲出版社
- 鄒勁風 2000 『南唐國史』南京大學出版社
- 諸葛計 1987 『南唐先主李昇年譜』江蘇古籍出版

【注】

- 1) 『資治通鑑』卷264、天祐元年(904)正月壬戌、中華書局1964、8626頁。
- 2) 〔山崎2010〕、久保田書評『法制史研究』61卷、2011を参照。
- 3) 〔愛宕1997〕363頁。
- 4) 〔愛宕1997〕389頁
- 5) 『資治通鑑』卷258、大順2年(891)、8417頁：朱全忠遣使與楊行密約共攻孫儒。儒恃其兵強、欲先滅行密、後敵全忠、移牒藩鎮、數行密・全忠之罪、且曰「俟平宣・汴、當引兵入朝、除君側之惡。」於是悉焚揚州廬舍、盡驅丁壯及婦女渡江、殺老弱以充食。行密將張訓・李德誠潛入揚州、滅餘火、得穀數十萬斛以賑飢民。泗州刺史張諫貸數萬斛以給軍、訓以行密之命饋之、諫由是德行密。
- 6) 『新五代史』卷61、吳世家、景福元年、中華書局1987、749頁。是歲、復入揚州、唐拜行密淮南節度使。
- 7) 『資治通鑑』卷261、乾寧4年(897)、10月甲子、8510頁。
- 8) 『資治通鑑』卷261、乾寧4年(897)、10月甲子、8511頁：(楊)行密由是遂保據江、淮之間、全忠不能與之爭。
- 9) 『新五代史』卷61、吳世家、天福2年、750頁：是歲、唐昭宗在岐、遣江淮宣諭使李儼拜行密東面諸道行營都統、檢校太師、中書令、封吳王。
- 10) 『資治通鑑』卷263、天復2年(902)6月、8577頁：楊行密、發兵討朱全忠、以副使李承嗣權知淮南軍府事。軍吏欲以巨艦運糧、都知兵馬使徐溫曰：「運路久不行、葭葦堙塞、請用小艇、庶幾易通。」軍至宿州、會久雨、重載不能進、士有飢色、而小艇先至、行密由是奇溫、始與議軍事。行密攻宿州、不克、竟以糧運不繼引還。
- 11) 『宋會要輯稿』崇儒5の21(中華書局1957)：天聖5年2月、知寧州楊及上「重修五代史」。仁宗曰：「五代亂離、事多淺近。」宰臣王曾等曰：「五代安危之迹、本末昭然、其餘可爲鑑誡、而不足師法。」帝深以爲然。
- 12) 〔安藤1980〕327頁
- 13) 『資治通鑑』卷263、8575頁には、馮弘鐸の造船についての周到な用意が見える。〔薛政超2011〕109頁を参照。
- 14) 『資治通鑑』卷263、天復2年6月甲申、8576頁。

15) 路振『九國志』卷2、馮弘鋒傳、『五代史書彙編』杭州出版社2004、3243頁では、昇州の設置を大順元年(890)とする。しかし、『新唐書』卷41、地理志、1057頁では「昇州江寧郡、至德二載(757)以潤州之江寧縣置、上元二年(761)廢、光啟三年(887)復、以上元、句容、溧水、溧陽四縣置」とあり、昇州は、757～761年に一時的に設置されたが、唐末の再設置は887年とする。

16) 『九國志』卷2、馮弘鐸傳、3243頁。

17) 『九國志』卷1、李神福傳、3222頁。

18) 『資治通鑑』卷265、天祐3年9月、8661頁。

19) 『九國志』卷1、秦裴傳、3227頁：及湖口、遇鄂帥劉存與潭軍戰沒、復授裴鄂嶽觀察使。『資治通鑑』卷266、開平2年5月乙亥、8697頁。

20) 『資治通鑑』卷266、開平2年5月己卯、8697頁以下。

21) 『資治通鑑』卷267、開平3年3月辛卯、8708頁。

22) 陸游『南唐書』卷1、烈祖本紀 天祐6年6月、『五代史書彙編』5463頁。

23) 陸游『南唐書』卷1、烈祖本紀 天祐6年6月、5463頁。『新五代史』卷62、南唐世家、765頁には「爲吳樓船軍使、以舟兵屯金陵。」とある。

24) 『新五代史』卷62、南唐世家、776頁には「李景初自恃水戰、以周兵非敵、且未能至江。」とある。

25) 陸游『南唐書』卷15、劉承勳傳、5583頁に「太子嘗欲一杉木作版障、有司以聞、烈祖書奏後曰「杉木不乏、但欲作戰艦、以竹代之可也。」」とある。

26) [小嶋2020]を参照。

27) 陸游『南唐書』卷1、烈祖本紀、5464頁。

28) 『資治通鑑』卷269、貞明3年(917)5月、8815頁。

29) 『釣磯立談』不分卷、『全宋筆記 第一編』大象出版社2003、4冊216頁。

30) 『新五代史』卷62、南唐世家、765頁：時江淮初定、州縣吏多武夫、務賦斂爲戰守、昇獨好學、接禮儒者、能自勵爲勤儉、寬仁爲政、民稍譽之。徐溫鎮潤州、以昇池等六州爲屬。溫聞昇理昇州有善政、往視之、見其府庫充實、城壁修整。…

31) 『景定建康志』卷10、南京出版社2008、244頁。『資治通鑑』卷268、乾化2年5月、8757頁。

32) 『資治通鑑』卷269、貞明3年5月、8815頁。宋齊丘の助言により潤州への轉屬に納得したくだけが諸書に見える。

33) 『十國春秋』卷10、陳彥謙傳、中華書局1983、140頁：先是金陵工成。彥謙上費用之籍于溫。溫曰吾既任公。何以此相瀆也。竟不復會計。溫始終推心腹用

之。故彥謙亦以此報溫。論曰可求善謀、而多中運機莫測握算若神。豈非其智有過人者、邪知祥精心錢穀一心佐理得與可求、齊稱宜矣。彥謙動勳庶務、終始不渝其志。亦可云東海之功臣也。

34) 『資治通鑑』卷271、貞明6年12月：吳金陵城成、陳彥謙上費用冊籍。徐溫曰、吾既任公、不復會計。悉焚之。

35) 『舊五代史』卷134、楊渭傳、1783頁：(吳王楊渭)政事咸委於徐溫。時溫爲鎮海軍節度、內外馬步軍都指揮使、乃于上元縣置昇州、盛開幕府、自握兵柄於上流、其子知訓等於揚州居以秉政、凡十餘年。

36) 『資治通鑑』卷269、貞明3年5月、8815頁。

37) 『舊五代史』卷134、楊行密傳、1786頁。

38) 『資治通鑑』卷270、貞明4年6月乙卯、8827頁以下。

39) 南唐は、税額 米一石ごとに3斗を別に納めさせ、かわりに鹽2斤を與えていた。

このようにして農業振興が行われていた。これを鹽米といった。(『十國春秋』南唐元宗本紀、中興元年12月、中華書局1983、231頁)

40) [伊原弘2020]「第3章 宋・元代の南京城—宋代建康府復元作業—」117頁を参照

41) 『資治通鑑』卷269、貞明2年(916)11月、8807頁。

42) 『舊五代史』卷134、楊溥傳、1783頁。

43) 『舊五代史』卷134、楊溥傳、1783頁。927年、吳王(楊溥)が帝位につくと、後唐との関係は絶たれることになった(『資治通鑑』卷276、天成3年2月庚辰、9013頁)。

44) 『資治通鑑』卷270 貞明5年(919)8月乙未、8849頁「吳徐溫遣使以吳王書、歸無錫之俘於吳越。吳越王繆、亦遣使請和於吳。自是吳國休兵息民、三十餘州民樂業者二十餘年。」あるいは『玉壺清話』卷9、李先主傳、中華書局1984、87頁。

45) 『新五代史』卷61、吳世家、761頁：(徐)溫亦自喜爲智詐、尤得吳人之心。初隨行密破趙鎰、諸將皆爭取金帛、溫獨據餘困、作粥以食餓者。

46) 『新五代史』卷62、南唐世家、766頁：及(李)昇秉政、欲收人心、乃寬刑法、推恩信、起延賓亭以待四方之士、引宋齊丘・駱知祥・王令謀等爲謀客、士有羈旅於吳者、皆齒用之。嘗陰使人察視民間有婚喪匱乏者、往往賙給之。盛暑未嘗張蓋・操扇。左右進蓋、必却之、曰、士衆尚多暴露、我何用此。以故溫雖遙秉大政、而吳人頗已歸昇。

47) 『資治通鑑』卷279、清泰元年2月癸酉、9103頁：先是、知誥久有傳禪之志。以吳主無失德、恐衆心不悅、欲待嗣君。宋齊丘亦以爲然。

- 48) 陸游『南唐書』卷5、周宗傳、5499頁。
- 49) 〔薛政超 2011〕76頁を参照。
- 50) 『資治通鑑』卷278、清泰元年正月乙未、9100頁：吳徐知誥、別治私第於金陵。乙未、遷居私第、虛府舍以待吳主。
- 51) 『資治通鑑』卷279、清泰元年2月丙子、9103頁：吳人多不欲遷都者。都押牙周宗言於徐知誥曰、主上西遷、公復須東行。不惟勞費甚大、且違衆心。丙子、吳主遣宋齊丘、如金陵、諭知誥罷遷都。
- 52) 〔諸葛計 1987〕89頁。
- 53) 『資治通鑑』卷279、清泰元年2月乙酉、9104頁。
- 54) 『資治通鑑』卷279、清泰2年10月、9136頁。
- 55) 『資治通鑑』卷280、天福元年11月癸巳、9153頁。
- 56) 馬令『南唐書』卷9、周本傳、『五代史書彙編』5324頁。〔諸葛計 1987〕95頁。
- 57) 「齊」の國名は、徐温（や徐知誥）が海州出身だったからだった可能性が考えられる（山根直樹氏のご教示による）。
- 58) 『景定建康志』卷20、今城郭、南京出版社2008、493頁。
- 59) 六朝舊城在北、去秦淮五里。故淮上皆列浮航、緩急則徹航爲備、吳沿淮立柵、前史所謂柵塘是也。至楊溥時、徐温改築、稍遷近南、夾淮帶江、以盡地利。
- 60) 〔許志強 2021〕350頁の圖13-2とそれに關連する352頁の本文を参照。〔石尚群 蟠鳳英 繆本正 1990〕も参照。
- 61) 〔許志強 2021〕は六朝時代の長干里について最新の考古成果に基づいて明らかにしている。
- 62) 『景定建康志』卷21、511頁。
- 63) 李白の醉態と、唐代の秦淮河周邊の都市化については、〔八木章好 2008〕159頁の分析が参考となる。また杜牧「泊秦淮」の描寫を参照。
- 64) 〔汪明明 2020〕36頁、「明清时期的西水关」の節を参照。
- 65) 『續資治通鑑長編』卷15、開寶8年2月癸丑、中華書局1979、335頁。
- 66) 〔郭黎安 1984〕83頁。
- 67) 〔薛政超 2011〕43頁の脚注①を参照。〔郭黎安 1984〕83頁によると、六朝時代に頻繁に洪水を引き起こしていた秦淮河の水量を分けたことは洪水を防止する役割をになったという。
- 68) 『玉壺清話』卷9、李先主傳、中華書局1984、88頁。
- 69) 馬令『南唐書』卷1、先主書、5265頁に「徐鉉曰…即金陵使府爲宮、唯加**鷗尾・欄檻**而已。終不改作。」とある。〔鄭滋斌 1997〕73頁、〔鄒勁風 2000〕170頁、〔薛政超 2011〕85頁も参照。
- 70) 宋逸名選『江南餘載』卷下、五代史書彙編 5114頁：德明宮、本南唐烈祖之舊宅。在後苑之北、即景陽臺之故址。有太湖石特奇異、非數十人不能運致、即陳後主之假山遺址。
- 71) 〔楊國慶・王志高 2008〕118頁、〔薛政超 2011〕50頁はこの史料に據って「德明宮」とする。
- 72) 『名臣碑傳琬琰之集』中 卷1、上海古籍出版社1990、174頁：牙城東北自僞朝德昌宮地。後庭鉛粉往在焉。公撰日昃徒、依神致禱、掘次表丈、得汞二百餘斤。鬻之獲緡百萬。以備供帳、綽然有餘。
- 73) 陸游『南唐書』卷15、劉承勳傳：德昌宮者、蓋南唐內帑別藏也。自吳建國、有江淮之地。比他國最爲富饒。山澤之利歲入不貲。烈祖勵以節儉、一金不妄用。其積如山。
- 74) 『長編』卷6、乾德3年9月是月、158頁：江左、籠山澤之利、國帑甚富。德昌宮、其外府也。簿籍淆亂、不可稽考。
- 75) 明李賢等『大明一統志』6卷、明萬壽堂刊本、日本國會圖書館藏、14b：南唐即金陵府建爲宮。外又建德昌宮。金帛貨泉皆在焉。
- 76) 北宋徽宗が皇子時代に住んでいた所は、即位後、龍德宮と名付けられている。
- 77) 德昌宮の地は、宋元を通じて官用地（軍營など）として用いられたが（『景定建康志』卷20、古城郭、南京出版社2008、485頁。）、明朝では王府、清朝では兩江總督府や江寧織造署が置かれた。太平天國時代に天王府が作られ、中華民國の總統府となり、「南京中國近代史遺址博物館」として現存している。
- 78) ①胡玉梅 陳英「碑亭巷發現南唐李昀的德明宮」『現代快報』2009年07月18日 <https://news.sina.com.cn/c/2009-07-18/090515973888s.shtml>
- ②「南京发现南唐德明宮遺址(组图)」2009年07月18日 02:33 新华报业网-扬子晚报 https://news.ifeng.com/mainland/200907/0718_17_1255820_1.shtml
- ③「南唐先主即位前住在南京碑亭巷“德明宮”終露眞容」『揚子晚報』2009年7月21日（中華古玩網）。http://www.gucn.com/Info_ArticleList_Show.asp?Id=33270
- 79) 〔張學鋒 2012〕66頁、70頁を参照。
- 80) ただし、佐川英治氏は建康の御道が直線の南郊行路として機能していたかということについて懐疑的である〔佐川 2016〕。ひとつは、御道がまがりく

ねっていたという有力な史料が複数存在することである。また、南郊壇が牛首山にあったのは、劉宋の孝武帝の時だけだった。そのほかの時期は、聚寶山の東側にあったのである。今後の検討を待ちたい。

81) [戸川 2015]

82) 風水思想では重要となる「南山」を都市計画に反映させたと考えられる。それは、「王氣」が満ちているこの都市における都市計画の特徴なのであろう。

83) 宋、曾極「南唐郊壇」：上帝神兵破石頭、別離歌管六宮愁。燔柴空有高壇在、乞與千年麋鹿遊。元、白樸「水調歌頭 感南唐故宮 就隱括後主詞」：南郊舊壇在、北渡昔人空。殘陽淡淡無語、零落故王宮。前日雕蘭玉砌、今日遣臺老樹、尚想霸圖雄。…

84) 『洪武京城圖志・金陵古今圖考』南京出版社 2017、「南唐江寧圖考」84-85 頁。

85) 『十國春秋』卷 15、陸游『南唐書』本紀、194 頁に詳しい。

86) 『資治通鑑』卷 282、天福 4 年 4 月癸未、9201 頁。

87) 『景定建康志』卷 19、南京出版社 2008、453 頁：實録：朱雀門、北對宣陽門、相去六里、名爲御道。夾開御溝、歲久湮塞。今宮城以南御街兩邊俱有溝。在居民屋下者、乃南唐所開、非六朝之舊跡。

88) 陸游『南唐書』卷 1、烈祖本紀昇元 3 年 4 月丁未、5467 頁。

89) [久保田 2019] に詳述。

90) 高麗使が「來貢方物」したのが、翌年 10 月のことであった。(陸游『南唐書』卷 1、烈祖本紀、昇元 4 年、十月己未、5468 頁。)

91) 陸游『南唐書』卷 1、烈祖本紀、昇元 2 年 5 月丁卯、5466 頁。

92) [諸葛計 1987] 84 頁。

93) [薛政超 2011] 51 頁。

94) 宋眞宗時代の楊侃『皇畿賦』(『宋文鑑』卷 2、中華書局 1992、25 頁) は、漢の張衡と班固の都城賦が、都邑の制度や宮殿の壯麗さを稱えているのに對し、開封の都城空間の繁華を指摘し、皇帝の徳の表象であることを主張する。

95) 開封については[久保田 2016] など。金陵については[張學鋒 2021] が、「封閉」性から、「開放」性に都市構造が變化したという論點によって近世都城の出發點であるとう指摘がある。

96) 李昇の金陵復興とともに「金陵」に王氣が戻ってきたというプロパガンダも行われている。『景定建康志』卷 12、247 頁。

97) 『新五代史』卷 63、南唐世家、768 頁。

98) 『資治通鑑』卷 282、天福年 6 年 4 月、9221 頁にも、群臣が争って、「よろしく出兵して舊疆を恢復すべし」と主張したが、「彼の民を安んぜしむれば、すなわち、我が民を安んぜん」と答え、消極的である。(陸游『南唐書』卷 1、烈祖本紀、5471-2 頁も参照)

99) 『資治通鑑』卷 281、天福 2 年 5 月、9173 頁。『南唐書』卷 3、5279 頁にも關連記事があり、宮嬪を派遣したという。

100) 南唐は契丹に長安の唐陵修築を申し出るが、斷られている(『資治通鑑』卷 286、天福 12 年、9338 頁)。

101) 馬令『南唐書』卷 3、嗣主書、保大 4 年、5272 頁：是歲、中原無主。

102) 馬令『南唐書』卷 3、嗣主書、保大 5 年正月、5273 頁：虜使來告曰「晉少主逆命背約、自貽廢黜。吾主欲與唐繼先世之好、將册命唐爲中原主。」帝命近臣、對曰「唐守江淮、社稷已固。與梁宋阻隔、若爾主不忘先好、惠錫行人、受賜多矣。其他不敢拜命之辱」。遣兵部侍郎賈潭、報聘。帝歎曰「閩役僊矣。其能抗衡中原乎。」

103) 馬令『南唐書』卷 3、嗣主書、保大 9 年正月、5276 頁。

104) 『資治通鑑』卷 287、天福 12 年 6 月庚辰、9368 頁。

105) 『續資治通鑑長編』卷 162、慶曆 8 年正月壬午、中華書局 1985、3904 頁：李景在江南、大建宮室府寺、其制皆倣帝京。

106) 『涑水記聞』卷 1、中華書局 1989、14 頁：初、梁太祖因宣武府署修之、爲建昌宮。晉改命曰大寧宮、周世宗復加營繕、猶未盡如王者之制。太祖始命改營之、一如洛陽宮之制。

107) 『江南餘載』不分卷、『全宋筆記 第一編』2 冊 246 頁：元宗罷朝、多御延英殿聽公卿奏事、因即其處爲閣甚壯。有司請置額名、上以生月在孟春、御題爲「千春閣」。

108) 『景定建康志』卷 11、建康表 7、252 頁。[薛政超 2011] 82 頁

109) 『資治通鑑』卷 290、廣順元年 12 月、9472 頁：唐悉收湖南金帛、珍玩、倉粟乃至舟艦、亭館、花果之美者、皆徙於金陵、遣都官郎中楊繼勳等、收湖南租賦以贍戍兵。繼勳等務爲苛刻、湖南人失望。

110) 陸游『老學庵筆記』卷 1、中華書局 1979、3 頁。

111) 『資治通鑑』卷 294、顯德 6 年 6 月丙子、9599 頁によると、後周世宗との講和後、世宗から勧められて、金陵城壁の營繕が行われたという。

112) 『新五代史』卷 62、南唐世家、776 頁。

113) 『新五代史』卷 62、南唐世家、775 頁：初、周師南征、無水戰之具、已而屢敗景兵、獲水戰卒、乃造戰艦數百艘、使降卒教之水戰、命王環將以下淮。景之水軍多敗、長淮之舟、皆爲周師所得。又造齊雲船數百艘、世宗至楚州北神堰、齊雲舟大、不能過、乃開老鸛河以通之、至大江。

114) 『玉壺清話』卷 3、中華書局 1984、26 頁。

115) 陸游『南唐書』卷 3、後主本紀、開寶 5 年正月、5490 頁。淮南戰役ののち、後周の使者がいたると鴟尾を外し、使者が歸國すると設置していたが、この時點で完全に撤去した。

116) 〔鄒勁風 2000〕144 頁、『續資治通鑑長編』卷 15、開寶 7 年 7 月壬子、321 頁。

117) 『續資治通鑑長編』卷 15、開寶 7 年 11 月甲申、327 頁。

118) 陸游『南唐書』卷 3、5492 頁。

119) 陸游『南唐書』卷 3、5492 頁以下を参照。

120) 『宋大詔令集』卷 118、400 頁「開寶九年有事南郊詔」には、「定鼎洛邑、我之西都、燔柴泰壇、國之大事。況削平江表、^{いたる}底定南方。惟率土之混同、自上天之降佑、內慙涼德、感是洪休、得不罄^{つくす}以恭虔。申其告謝。・・・」とある。

121) 〔久保田 2018〕などを参照。

122) 〔劉浦江 2010〕所収、「正統論下的五代史觀・3 節、南唐正統論之泛起」(50 頁)には、歴代の南唐正統論がまとめられている。五代を華北の王朝交代として直線的に捉えるのではなく、唐の繼承王朝としてしての南唐を意識する歴史觀も存在していたことも指摘しておきたい。例えば、明人陳霆『唐餘紀傳』の序では、「自歐陽氏作五代史、全以正統歸之偏閩之國、故其於南唐、例之僭僞。」とし五代諸國について「朱梁以盜賊、後唐・晉・漢以夷狄、郭周以卒伍崛起、類同篡弑相踵」とし、五代中原國家を正統王朝とすることより、南唐にほうが、正統とする根拠があることを指摘する。

【付記】本研究は JSPS 科研費 20K01012 の助成を受けたものです。